

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720152

研究課題名(和文) ドイツ語圏における国民意識とジェンダーの形成についての研究

研究課題名(英文) Studies on the formation of national identities and gender norms in the German-speaking regions

研究代表者

川島 隆 (Kawashima, Takashi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10456808

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代社会において成立した男女観は、新たなレトリックによる男女差別の正当化という側面を含んでいる。それは19世紀末から20世紀初頭にかけての時期、ドイツ語圏で遅まきながら女性の社会進出が進むなかで、極端な女性嫌悪の風潮へと行き着いた。興味深いことに、ヴァイニングァー、クラウス、カフカなどのユダヤ系男性知識人においては、こうしたジェンダー観が自らの民族意識と交錯している。つまり、ネガティブな意味での「女性」の像が「ユダヤ人」の像と重ね合わされているのである。本研究では、この重なり合いの現象を出発点に、ナショナル・アイデンティティ(民族意識、国民意識)の形成とジェンダー規範の相互作用を追った。

研究成果の概要(英文)：The formation of the new gender system in the modern society since Rousseau was in a way a process of justification of the new form of discrimination between sexes. In the German-speaking regions, this trend finally led, in a reaction to the ongoing emancipation of women through the 19th century, to an epidemic of discourses of radical misogyny at the turn of the century. For example Weininger, Kraus, Kafka combined this hatred against women with the so-called "Jewish self-hatred". Starting from this fact, I examined the interaction between the construction of national identities and gender norms in modern German literature and culture.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ジェンダー ナショナル・アイデンティティ 国民意識 異文化表象 他者像 ステレオタイプ ス
イス像 ポップカルチャー

1. 研究開始当初の背景

近代市民社会においては、国民意識と男女の性別役割の観念が、個人のアイデンティティ形成の中核を占めてきた。ナショナリズムとジェンダーの秩序が相互補完的に社会統合の力として機能した経緯については、国内外に多くの研究の蓄積がある。しかし、その研究対象はもっぱら19世紀末から20世紀初頭の文化現象に集中してきた。また、歴史学や社会学の分野の研究が圧倒的に多いため、概念モデルや「タイプ」を取り出すことに主眼が置かれ、ゆえに個々の事例における人間の営みの個性が捨象されがちであった。

2. 研究の目的

これに対し、ドイツ語圏において市民社会が生成し、市民的なジェンダー秩序が整備され、同時にナショナル・アイデンティティの模索が始まっていった18世紀末から19世紀全般を視野に入れる必要性が痛感された。また、従来は見落とされていたような複数の声を拾い上げることで、国民意識の形成と市民的なジェンダー観念の発達がいかに交錯しており、また多面的なものであったかが浮かび上がると考えた。そのような問題がテキスト内にいかに結晶化しているかを探ることを研究の主目的に据えた。

3. 研究の方法

上記の目的を効率的に達成するための手段として、文学研究の手法を用いることとした。すなわち、とくに文学的テキストを研究対象とする一方、同時代に当該のテキストの周辺に展開していた言説を分析することにした。さらに、その言説が当時どのようなメディア機構を通じて社会の中で共有されていたのか、あるいは共有されずに終わったのか、という点の解明にも踏み込んだ。

本研究は個人研究であるが、当初から科研グループ「プラハとダブリン、20世紀文学の二つのトポス」(基盤研究(B))と共同研究を行い、平成25年度からは同じく「世界文学としてのアンデルセン『人魚姫』の超領域的研究と教養教育への応用モデル」(基盤研究(C))と共同で国際シンポジウムを開催して海外の研究者と連携しつつ研究を進めた。

なお、当初はあまり想定していなかった点ではあるが、上記の共同研究を行う過程で、研究成果を教育の分野や社会一般へと還元することの重要性に気づき、研究と教養教育をリンクさせる方法の開発や、一般向け書籍やオープンな講演会などに力を入れることになった。

4. 研究成果

【平成24年度】19世紀後半～20世紀初頭に活動したヨハンナ・シュピーリ、マリー・エーブナー＝エッセンバッハ、カール・クラウス、オットー・ヴァイニンガー、フランツ・カフカなどのドイツ語圏の作家を取り上げ、

ジェンダーとナショナリティをめぐる理論的な研究を進めた。その結果、当時の社会において「女性」のジェンダー・アイデンティティが大きく変動し、そこから20世紀初頭における「男性」やひいては「人間」のアイデンティティの再定義の必要性がきわめて広範囲で生じていたことが浮き彫りになった。

他方、ライン地方の郷土作家ヘルマン・アダム・フォン・カンブが19世紀前半に執筆した作品におけるスイスやアメリカなどの「外国」の表象を分析した。カンブは、当時のスイス旅行ブームによって形成された文学的トポスに接続することで、アメリカへの移民流出によって農村共同体の解体の危機に瀕していたドイツにあって「郷土愛」の重要性を訴えたのである。

以上の成果を各学会にて報告し、各学会誌で公表した。また、カンブ作品の翻訳を刊行した。

【平成25年度】19世紀ボヘミア(現チェコ)地域におけるナショナリズム問題を考えるうえでの鍵となる思想家としてフリッツ・マウトナーを取り上げ、従来はあまり重要視されてこなかったマウトナーのボヘミア小説の民族主義的な要素を、マウトナーの言語哲学と突き合わせる作業を行った。そこから、多民族・多言語地域における言語問題とナショナル・アイデンティティの形成をめぐる複雑な様相の一端を明らかにすることができた。

他方、前年度に研究した作家ヘルマン・アダム・フォン・カンブと関連づけられる女性作家ヨハンナ・シュピーリを主に取り上げ、現在ではスイスの国民作家とされるシュピーリの文学におけるナショナル・アイデンティティの問題と、女性作家として(おそらく)ヨーロッパで初めて女性の高等教育(大学進学)と職業化の問題を少女小説のテーマとしたシュピーリにおけるジェンダー問題の布置を考察した。

以上の成果を各学会にて報告し、各学会誌で公表した。また、シュピーリ文学に関する一般向けの概説書を刊行した。さらに、スイス民衆文学の専門家アルフレート・メッサーリ(チューリヒ大学)と、カンブやシュピーリの文学に詳しいペーター・ビュトナー(北京航空航天大学)両氏を招聘し、シュピーリ文学に関する国際シンポジウムを開催した。

【平成26年度】現代社会において、一つの国民国家の枠内で形成されたアイデンティティが他国のマスメディアによる表象との相互作用にもとでいかなる変容をこうむっていくのかをメディア論的な観点から重点的に扱った。以上の成果を各学会にて報告し、各学会誌で公表した。また、メディア哲学の分野の翻訳書を刊行した。

他方、前年度に扱ったスイスの作家シュピーリに的を絞り、その代表作である児童文学の古典『ハイジ』を例に、一つの文学作品が

国際的かつメディア横断的に人気を博するなかで、スイスの国際的なイメージ形成にどのように寄与し、さらにその像がスイス人の国民的アイデンティティ形成にどのようにフィードバックされるのかを分析した。

また、この分野における研究の第一人者であるジャン＝ミシェル・ヴィスマール(作家)とジュネーヴ国際ブックフェアで共同発表を行い、同氏の著書の翻訳を刊行した。また、同氏および『ハイジ』の最新の邦訳を刊行した若松宣子(中央大学)を招き、国際シンポジウムの第二弾を開催した。

以上の研究により、ジェンダーとナショナリズムのきわめて複雑に入り組んだ関係の一端を明らかにすることができたと考えている。とくに重要なのは、ナショナル・アイデンティティとは自律的に形成されるものではなく、しばしば「他者像」を介して形成されるという点である。すなわち、他者から押しつけられた(往々にしてネガティブな)像を積極的に意味づけなおすことで、初めて自己像が成立しうるのである。なお民族的＝国民的な他者像が構築される際には、いわば「身近な他者」として社会の中で構築されている女性像とのアナロジーが大きな意味をもつ。こうして、ナショナルなアイデンティティはジェンダー上のアイデンティティと一種のねじれた関係を結ぶことになる。

そうやって形成されたアイデンティティは各種メディアを通じて拡散されるが、その作用はけっして一つの民族＝国民の内部では完結しない。インターナショナルな相互作用の中で再び増幅され、強化され、やがて固定化したものが、国民意識と呼ばれるものの実体なのである。文学テキストとその周辺の言説に着目することで、この意識が国際的に構築されていくダイナミズムが見えてくる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

川島隆、ルポルタージュが伝える東日本大震災 ドイツにおける「フクシマ」表象の一断面(特集:カタストロフィ) 日本独文学会『ドイツ文学』(148)、2014、105-119、査読有。

川島隆、マウトナーの二つのボヘミア小説 同化ユダヤ人の「母語」と民族アイデンティティをめぐる、神戸・ユダヤ文化研究会『ナマール』(18)、2013、51-61、査読有。

川島隆、マウトナーのナショナリズム思想の展開 言語批判と「母語」礼賛のはざままで、城真一編『プラハとダブリン 20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス フリッツ・マウトナーとその射程』、日本独文学会研究叢書 97号、2013、38-53、査読無。

川島隆、ゲーテを読むカフカ 「大文学」と「小文学」のはざままで、ゲーテ自然科学の集い『モルフォロギア』(35)、86-103、2013、査読有。

川島隆、Zwischen Richard Wagner und dem jiddischen Theater - Volk, Sprache und Kunst in den Erzählungen Franz Kafkas, JGG: *Neue Beiträge zur Germanistik* (145)、2012、155-171、査読有。

川島隆、人間のような犬と、犬のような人間 エーブナー＝エッセンバッハからカフカまで、松村朋彦編『動物とドイツ文学』日本独文学会研究叢書 87号、2012、39-54、査読無。

川島隆、ヨハンナ・シュピーリの『ジーナ』 女性の大学教育と職業をめぐる葛藤、希土同人『希土』(37)、2012、38-57、査読無。

川島隆、オットー・ヴァイニングとカール・クラウス 女性嫌悪から男性ジェンダーの再構築へ、岩波書店『思想』(1058)、2012、134-151、査読無【依頼原稿】。

〔学会発表〕(計17件)

川島隆、東西比較 『アルプスの少女ハイジ』 アニメ吹替版から見えてくるもの(シンポジウム:シュピーリと『ハイジ』の世界)、日本ハイジ児童文学研究会/プロジェクト人魚、2015年3月15日、東京理科大学(東京都新宿区)。

川島隆、日本における『ハイジ』受容の諸相、日本比較文学会関西支部例会、2015年1月31日、立命館大学(京都府京都市北区)。

川島隆、ヨハンナ・シュピーリ『ハイジ』の宗教性、日本児童文学学会例会、2014年12月13日、日本フラワーデザイン専門学校(東京都新宿区)【招待講演】。

川島隆、「人魚」文学を扱う授業の実践報告 多言語文学間の共同研究と教養教育への還元モデル(中丸禎子・田中琢三と共同発表) 日本独文学会秋季研究発表会、2014年10月12日、京都府立大学(京都府京都市左京区)。

川島隆、ネット時代の文学と「盗作」の問題 ヘレーネ・ヘーゲマンの『アポロートルを轢き殺す』をめぐる(シンポジウム:現代ドイツ文学 境界の揺らぎ) 日本独文学会秋季研究発表会、2014年10月11日、京都府立大学(京都府京都市左京区)。

川島隆、カフカの『審判』、日本民主主義文学会「第30回土曜講座:ドイツ文学への招待」、2014年6月28日、日本民主主義文学会事務所(東京都豊島区)【招待講演】。

川島隆、Comment expliquer la relation privilégiée entre le Japon et la Suisse ? - Heidi et sa créatrice

Johanna Spyri (Jean-Michel Wissmer と共同発表) 28ème Salon du livre et de la presse, Genève, 2014年4月30日、Parlexpo, Switzerland【招待講演】。

川島隆、フリッツ・マウトナーのポヘミア小説、関西チェコ/スロバキア協会「知遊サロン」、2013年11月9日、兵庫トヨタ自動車本社ビル(兵庫県神戸市中央区)【招待講演】。

川島隆、ヨハンナ・シュピーリの生涯と作品、スイス文学研究会、2013年7月27日、明治大学(東京都千代田区)。

川島隆、モダニズムにおける<亡霊>と<声> ダブリンとプラハを中心に(ワークショップ問題提起)(吉川信、桃尾美佳、岡室美奈子、城真一と共同発表)、日本英文学会関東支部、2013年6月22日、明治大学(東京都千代田区)。

川島隆、カフカが触れたマスメディアの報道と「コミュニティメディア」の役割、神戸・ユダヤ文化研究会「第3回文化講座」、2013年3月23日、兵庫県私学会館(兵庫県神戸市中央区)【招待講演】。

川島隆、ゲートを読むカフカ 大文学と小文学、ゲート自然科学の集い京都例会、2013年2月10日、立命館大学。

川島隆、ヘルマン・アダム・フォン・カンプの『アルプスの少女アデライーデ』 スイス像とアメリカ像の意味、日本ヘルダー学会秋季研究発表会、2012年12月15日、梅田ちゃやまちアプローズタワー(大阪府大阪市北区)。

川島隆、日本におけるカフカ受容の流れ(シンポジウム:『変身』から100年の比較文学)、日本比較文学会第48回関西大会、2012年11月17日、立命館大学(京都府京都市北区)。

川島隆、ルポルタージュは震災を伝えられるか J・ハーノとR・ツェルナーの日本滞在記を中心に(シンポジウム:フクシマ後のドイツ文学)、日本独文学会秋季研究発表会、2012年10月14日、中央大学(東京都八王子市)。

川島隆、カフカ『あるアカデミーへの報告』とダーウィニズム(ミニシンポ:啓蒙と反動)、日本独文学会京都支部春季研究発表会、2012年6月23日、大谷大学(京都府京都市北区)。

川島隆、フランツ・カフカ『変身』(100分 de 名著) NHK Eテレ、2012年5月、NHK放送センター(東京都渋谷区)【招待講演】。

〔図書〕(計7件)

ジャン=ミシェル・ヴィスマール著、川島隆訳、『ハイジ神話 世界を征服した「アルプスの少女」』、晃洋書房、2015、226。

宮田真治・畠山寛・濱中春編、『ドイツ文化55のキーワード』、ミネルヴァ書房、

所収:川島隆、郵便 ドイツ生まれの情報伝達システム』、2015、275(72-75)。ジュビレ・クレマー著、宇和川雄・川島隆・勝山紘子・永畑紗織訳『メディア、使者、伝達作用 メディア性の「形而上学」の試み』、晃洋書房、2014、317。ちばかおり・川島隆、『図説 アルプスの少女ハイジ 『ハイジ』でよみとく19世紀スイス(ふくろうの本)』、河出書房新社、2013、128。

青地伯水編、『啓蒙と反動』、春風社、所収:川島隆、ダーウィニズムの裏側 ヘッケルの進化論から見たカフカ『あるアカデミーへの報告』、2013、293(199-232)。ペーター・ピュトナー著、川島隆訳、『ハイジの原点 アルプスの少女アデライーデ』、郁文堂、2013、137。

川島隆、『カフカ「変身」 確かな場所など、どこにもない(NHK テレビテキスト 100分 de 名著)』、NHK出版、2012、112。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川島 隆 (Kawashima, Takashi)

京都大学 文学研究科 准教授

研究者番号: 10456808